

2016年(平成28年)8月8日(月) 泡瀬特別支援学校災害時要支援者応急搬送訓練

沖縄県立泡瀬特別支援学校(沖縄市比屋根五丁目2-20)の教職員約60名に対し、非常時における応急搬送法の講習を実施した。同校長の真喜屋祥子氏によると、同校に入校する障害者のほとんどが重度であり、地震による液状化に陥った場合には車椅子での避難誘導ができないことが予想される。そのようなときに教職員が車椅子に代わる移動の仕方を学ぶ必要があったため、今回、NPO 法人防災サポート沖縄に講習を依頼することになった。

今回の講習は、一人搬送、ロープを用いた搬送、Tシャツ、ごみ袋、毛布を用いた担架作成など実施した。記事は沖縄タイムス8月10日(水)の掲載。なお、指導にあたったのは沖縄市高齢福祉課職員4名と防災サポート1名が対応したが、県立の施設に市とNPOが対応したことに感謝の言葉があった。



第3種郵便物認可

# 災害弱者の備え学ぶ

## 泡瀬特支校 備品で担架製作

【沖縄】大災害時に足の不自由な児童・生徒を迅速に搬送する実践研修が8日、県立泡瀬特別支援学校であった。同校の小学から高等部までの教員ら約60人が参加した。校内にあるほうきや物干し竿などを使って担架(ストレッチャー)を作り、同僚を搬送。大規模災害への備えの大切さを再認識した。

**防災を考える**

同校は2015年度から防災に関して「学校安全体制整備事業の研究校」として県教委が指定。これまで東日本大震災規模の地震や津波が発生したという想定で、訓練や避難経路の見直しなどを研究し、子どもたちをいかに早く避難させて安全を確保するかについて検討を進めてきた。この日の研修では、防災に詳しいNPO法人「防災サポート沖縄」の長峯政美副理事長が講師を務めた。教員らは校内の備品で担架を製作。ほうきや物干し竿をパイプの代わりにし、家庭用ごみ袋やTシャツをマットとして利用した。手作り担架に同僚を乗せ、階段を上り下りした。

同校小学部の宮城寛之教諭(34)は「ごみ袋を使って担架が作れることに驚いた。本当の災害が発生した際に迅速に対応できるよう、繰り返し訓練し、防災意識を高めたい」と話した。

講師の長峯副理事長は「素早い判断で周囲の物を使って子どもたちを搬送しなければならぬ。日頃から災害を想定した訓練をしてほしい」と呼び掛けた。